

ベトナム阮朝期建築生産組織に関する史料調査研究

研究代表者 木谷 建太
(理工学研究所 次席研究員)

1. 研究課題

ベトナム中部都市フエは、ベトナム全土を、現在の形で統治した最初で最後の王朝である阮朝（1802～1945）の都であり、碁盤目状の構造を有する中国的な街区を、フランス的なヴォーバン式城郭が囲む構成にみられるように、多様な文化が一定の秩序のもと融合している。しかし、阮朝崩壊後の混乱や、続くベトナム戦争によって多くの文化や技術体系が失われた。残存している遺構から阮朝の王宮都市における宮殿建築の中心要素と骨格を見出し、史資料の情報を繋ぎ合わせていき往時の建築文化、ひいてはフエの都市全体の復原像を描くことが、研究の動機である。

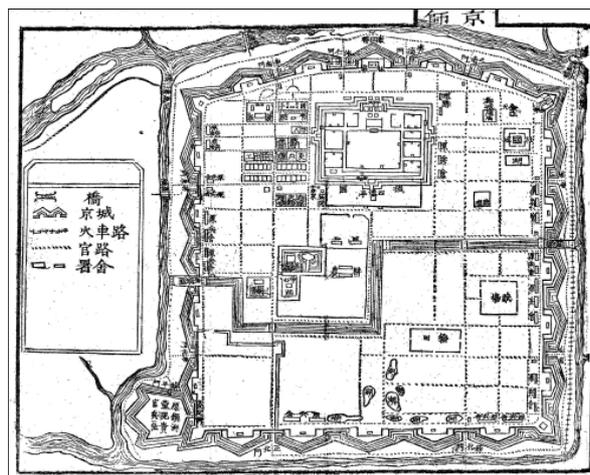


Fig. 1 『大南一統志』京師図

これまでの研究により、ベトナムの歴代王朝で公定尺とされてきたものは、1尺あたり、424ミリメートル近傍であったことが明らかとなっており、中国、韓半島、日本のそれとは異なる。これは、中国・雲南やタイの少数民族に残る尺度に近いことがわかっており、この地域の基層文化の一つとみることができる。また、魯班尺という吉凶尺を用いた家屋（宮殿）の設計がなされるが、いわゆる風水とよばれる体系とともに、ベトナムへ伝来している。特に陵墓に用いられる陰宅風水における魯班尺の使用法が、台湾や沖縄など南シナ海を介した地域で共通しており、海洋アジア文化圏の存在を示唆している。阮朝は、漢字文化を中国から受容する一方で、前身となる広南国の時代に攻略したチャンパの文化・技術を取り込んで、腋尺という正三角形のものさしを用いて設計を行う、登り梁ケオを合掌組にした独自の架構形式を宮殿に用いたことは明らかにしたが、その発生過程についてはなお課題となっている。以上、周辺地域との比較研究を進めることにより、阮朝の、ひいてはベトナムの建築生産組織の史的評価を与えることを研究の目的とする。

2. 主な研究成果

2.1 ベトナム国立第四公文書館での史料調査

ベトナムは紀元前2世紀から10世紀に渡る中国の支配からの独立後も漢字を表記文字として使用した。李朝（1010～1225）に始まる「越読」の成立によって大量の漢語がベトナム語の語彙に採り入れられ、「チュノム（字喃）」という仮借と形声による造字が考案される。阮朝に至るまでの歴代王朝に、科挙制度を基調とした漢字文化は継続され、阮朝は漢字教育が最も盛んな時期とされる。

このため史料としては、主として、往時に編纂された漢喃文献（漢籍に一部、字喃と呼ばれる国字を含む）を用いるが、その所蔵機関は、歴史的経緯により多岐にわたる。研究代表者は、すでにハノイにある漢喃研究院（Viên Nghiên cứu Hán Nôm）および国立第一公文書館（Trung tâm Lưu trữ Quốc gia I）を調査し、その所蔵についての情報を得、さらに一部の所蔵史料（未公開）の複写を得ている。漢喃研究院は、阮朝期にフランス極東学院が蒐集したものを継承しており、これに加え、独立後に収集した多数の史料を収蔵する。チャン・ヴァン・ザップによる二冊の目録にて、所蔵本を確認することができ、第一国立公文書館では、阮朝硃本（皇帝の御覽または御批を経た奏文や上疏文・報告などの公文書の総称）が所蔵され、陳荊和による二冊の目録から方法を引き継ぎ、目録をデータベース化（言語：ベトナム語）されており、同館に設置されているPC端末にて検索が可能となっている。

今年度は、国立第四公文書館（Trung tâm Lưu trữ Quốc gia IV）を対象とした史料調査を行った。ベトナム在住の研究協力者を通じて、同館アーキビストと連絡を取り、同館には、未公開の阮朝期漢喃文献や仏領期史料が数多く所蔵されていることがわかっており、この一部の複写を行い、デジタル・アーカイブ化した。



Fig. 2 ベトナム国立第四公文書館（ダラット）

2.2 周辺地域の比較調査研究：ベトナム北部・中国東南沿海部

協力者として参加する、日本学術振興会・科学研究費補助金（基盤研究（A）・海外学術調査）「歴史環境都市ベトナム・フエの持続的発展のための技術指針と文化遺産保存活用学の構築」（研究代表者：中川武）による研究調査の一部である。当該研究は、これまで20年以上の研究成果の上に立って、文化遺産を静的なモノとしてだけでなく、周辺環境や社会を含めたコトとして捉えて、その動的な様相を明らかにして、実践的・総合的に文化遺産保存活用学の構築を企図するものであり、本研究との直接の関連を持たない。ただし、ベトナム・フエを対象とした同一の研究成果をもとに構想されたものであり、一方で得られた知見が、もう一方へ何らかの示唆を与えることは明白であり、相乗効果が期待できるため、ここで得られた知見の一部を本研究の成果として報告する。

ベトナム北部では、主にハノイ周辺の仏教寺院・ディン（亭）の調査を行った。

ディン・タイダン（Đình Tây Đằng）

崇巖寺（Chùa Mía）

ディン・モンフー（Đình Mông Phụ）

崇福寺（西方寺、Chùa Tây Phương）

大悲寺（貝溪聖跡、Chùa Bối Khê）

法雨寺（Chùa Đậu）

法雲寺（Chùa Thái Lạc）

仏教寺院やディンは、ベトナム中南部と同様とは異なる様式を持ち、特に斗拱を用いることは大きな差異である。



Fig. 3 ディン・タイダン

中国東南沿海部では、仏教寺院や祠堂、書院、博物館などを調査した。

- 六榕寺（広州）
- 光孝寺（広州）
- 陳氏書院（広州）
- 南越王宮博物館（広州）
- 道韻楼（潮州）
- 雅約公祠（潮州）
- 祖廟（佛山）
- 東華里民家（佛山）



Fig. 4 陳氏書院

中国東南沿海部は、中国歴代の首都から離れており、その建築様式は、中国における建築に関する文献である『营造法式』（宋代）

や『魯班経』（明代）、『工程做法則例』（清代）にみられるものとは異なることが把握された。なお、その構成要素を比較する限り、建築様式は、ベトナム北部、中南部へと段階的に伝達された可能性が高い。これまで種々のケース・スタディを通じて、交易ネットワークによる様々な事物の伝播・影響が研究されてきたが、造営尺度と建築設計技術については、ある程度の生産組織の長期間の交流を基礎とする技術の一つであり、技術レベルや技能といった、伝達の難易の差と、伝わるネットワークの陸域・海域の差に関連性があるとする研究代表者の問題設定を裏付けるものとなる可能性がある。

2.3 周辺地域の比較調査研究：ベトナム南部

ベトナム南部は、もっとも早い段階からフランスのインドシナ植民統治下にあり、コーチナとよばれた。阮朝においても、明の遺臣を受け入れ、それを派遣することによって、当時のチャンパを攻略した経緯があるため、チャンパ・中国・フランスからの重層的な影響がある。今年度は、メコン川以西の地域にある、邸宅（祠堂）、仏教寺院、ディン（亭）の調査を行った。

- 黄水黎邸（Nhà cổ Huỳnh Thủy Lê）
- 亭神永福（Đình Thần Vĩnh Phước）
- 福興寺（Phước Hưng Tự）
- カイ・クオン邸（Nhà xưa ông Cai Cường）
- 楊氏祠府（Phủ Thờ Họ Dương）
- 龍泉古廟（Long Tuyền Cổ Miếu）
- 南雅堂（Nam Nhã Đường）
- 三寶寺（Tam Bảo Tự）



Fig. 5 楊氏祠府

3. 研究業績

3.1 学術講演

木谷建太、中川武。「監城使の職能および阮文燕の出自について ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復原的研究 その 195」『日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2』福岡、2016年8月、日本建築学会、799～800頁。

4. 研究活動の課題と展望

引き続き、日本学術振興会・科学研究費補助金（基盤研究（A）・海外学術調査）「歴史環境都市ベトナム・フエの持続的発展のための技術指針と文化遺産保存活用学の構築」（研究代表者：中川武）に、研究協力者として参加する。

2017年度より、日本学術振興会・科学研究費補助金（若手研究（B））「ベトナムの尺度及び建築設計技術に関する陸域・海域の両ネットワークによる伝播と受容」（研究代表者：木谷建太）が採択された。本研究と相関関係をもつ研究であり、阮朝期における重要史料のうち唯一内容を確認できていない『大南會典事例続編後次』や、フランス植民統治下、インドシナ半島をはじめとした東南アジア全域で調査研究を行ったフランス極東学院の史資料群を所蔵する同学院図書室への調査や、同じく往時の写真資料など多くの史料を所蔵する、エクス＝アン＝プロヴァンスの海外公文書館への調査も計画している。

さらに、2017年度より、日本建築学会・[若手奨励]特別研究委員会として、「建築書と建築理論若手奨励特別研究委員会」（委員長：安岡義文（東京大学））が始まり、その委員をつとめることとなった。西洋文明圏外の古代・中世における建築書と建築理論について文献調査・研究することをテーマとしており、本研究との関係も深い。